

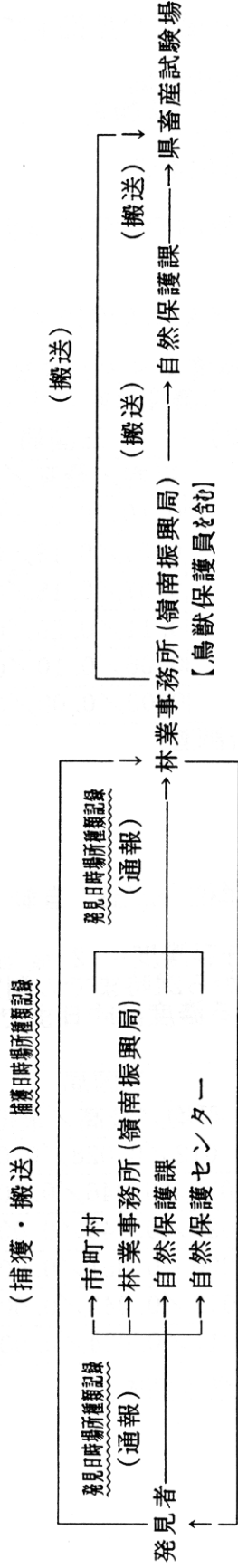
( 資 料 2 )

自然保護センター、自然保護課

タンカー油流出事故に伴う水鳥救護体制について

1 救護体制

自然保護課、自然保護センター、林業事務所(嶺南振興局)、鳥獣保護員は1月7日より沿岸部のパトロールを実施する。



( 捕 獲 ・ 受 取 ) 捕獲日時場所種別記録

2 救護した水鳥の扱い方

- ① ダンボール箱に新聞紙、ちり紙を敷き、暗くて温かい(25℃程度)状態で体力の回復を待つ。
- ② 絶対に水洗いはせず、タオルや布で口部および鼻孔に付着している汚れを拭き取る。
- ③ 鳥が油に汚染した場合、水分が皮膚まで容易に達し体温の低下をまねく。対応策として水分や汚れを拭き取るときは、必ず羽毛の育成する方向に沿って、前方から後方へしぼるよう拭き取る。その際、羽の微細構造を破壊してしまうので決して擦ってはいけない。
- ④ ダンボール箱を密封する場合は、両側に鉛筆大の穴を9個程度開ける。
- ⑤ 原則1箱に1羽を入れる。鳥が少しの余裕を持ってすっぽり入り程度の大きさがよく、箱の中で鳥が羽を広げたり、歩き回れるのは大きすぎない。
- ⑥ 車で搬送する場合は、25℃程度に温めること。

3 その他

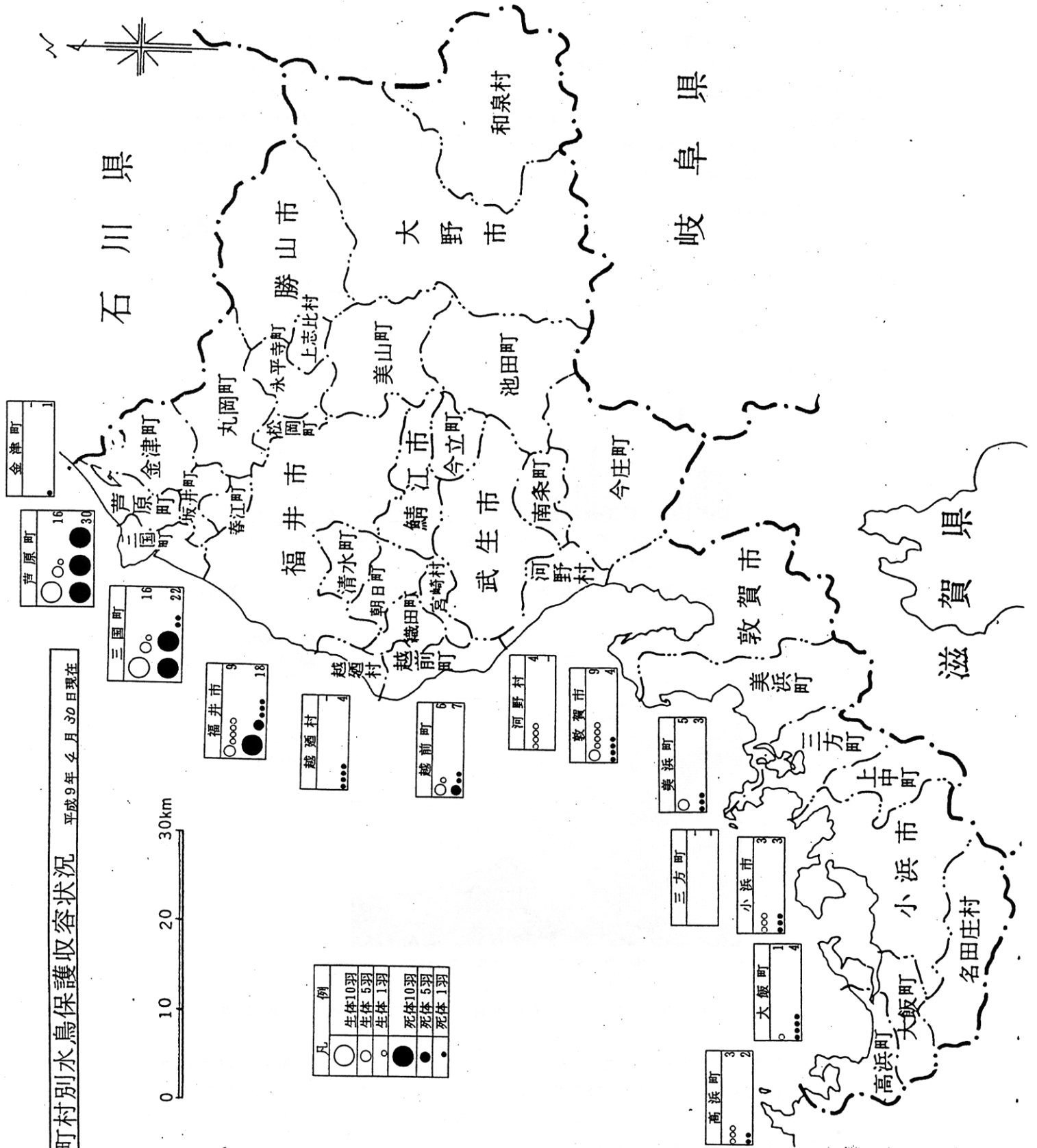
- ① 救護した水鳥は、日本獣医師会野生動物救護獣医師協合理事馬場国敏氏の指導のもと福井県獣医師会会員、福井県自然保護センター職員が洗浄、治療を行う。
- ② 洗浄、治療した水鳥は、県自然保護センターにてリハビリを行う。

市町村別水鳥保護収容状況

平成9年4月30日現在



例	
○	生体10羽
○	生体5羽
○	生体1羽
●	死体10羽
●	死体5羽
●	死体1羽



## 保護・回収された水鳥の種と個体数について

(「水鳥救護の記録(平成10年3月 油汚染水鳥救護福井の会)から抜粋)

1月9日に、最初に保護・回収されたのはミツユビカモメ、ウミスズメ、アカエリカイツブリであった。個体数は、徐々に増加し1月15日に20羽と最も多く、2月2日まで1日あたり平均6.2羽の個体が保護・回収されたが、2月3日以後は、多くて1日あたり3羽となった。最後に保護されたのは、3月10日のウミネコであった(図1)。初期は、アカエリカイツブリとウミスズメが大半を占め、次いでウトウが多くなり、15日めを過ぎるとオオハム類が、そして20日めを過ぎるとウミネコが多くなった(図2)。

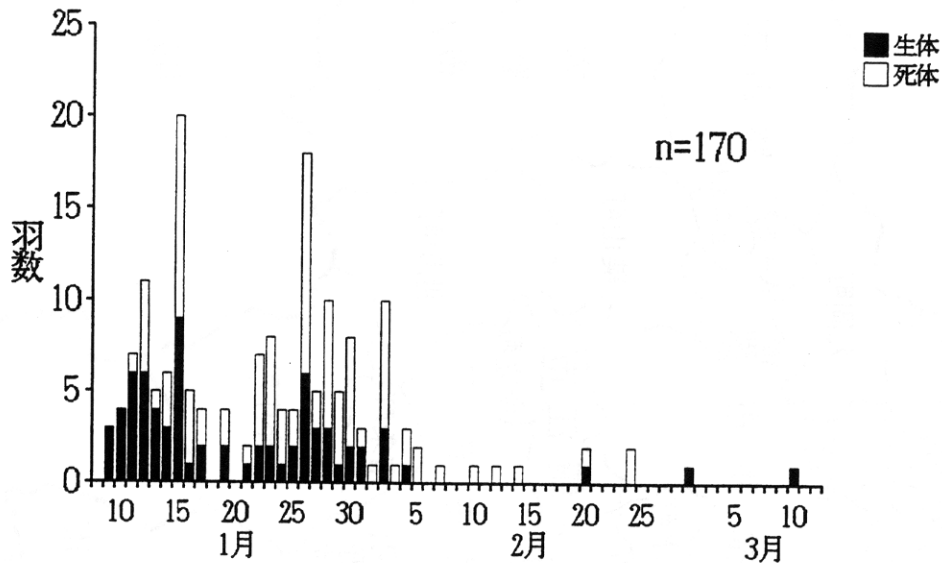


図1. 福井県において保護・回収された油汚染水鳥の個体数の日変化。

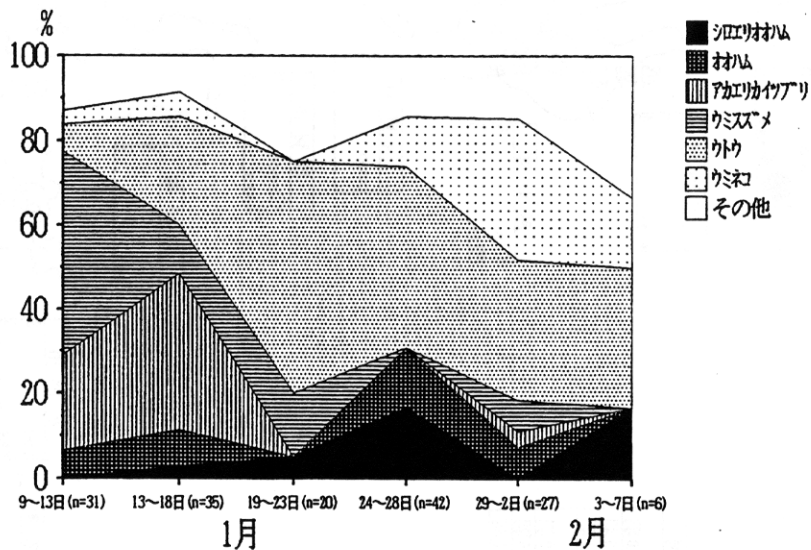


図2. 福井県において保護・回収された油汚染水鳥の種構成の変化。

最終的に、重油の付着・汚染で、計5目6科19種170羽の水鳥が保護・回収された(表1)。その多くは海洋性の種で、ウトウ53羽(31.2%)、ウミスズメ25羽(14.7%)、シロエリオオハム またはオオハム計24羽(計14.1%)、アカエリカイツブリ21羽(12.4%)などで、それらで全個体数の86.4%を占めた。

表1. ナホトカ号の重油流出事故によって福井県で保護・回収された種と個体数.

目	科	種	学名	生体 (羽)	死体 (羽)	小計 (羽)	割合 (%)
アビ	アビ	アビ	<i>Gavia stellata</i>	1	0	1	0.6
		シロエリオオハム	<i>Gavia pacifica</i>	5	6	11	6.5
		オオハム	<i>Gavia arctica</i>	11	2	13	7.6
カイツブリ	カイツブリ	アカエリカイツブリ	<i>Podiceps grisegena</i>	14	7	21	12.4
		ハジロカイツブリ	<i>Podiceps nigricollis</i>	2	2	4	2.4
ペリカン	ウ	ウミウ	<i>Phalacrocorax filamentosus</i>	2	4	6	3.5
		ヒメウ	<i>Phalacrocorax pelagicus</i>	0	2	2	1.2
ガンカモ	ガンカモ	ホシハジロ	<i>Aythya ferina</i>	0	1	1	0.6
		シロガモ	<i>Histrionicus histrionicus</i>	0	1	1	0.6
		ウミアイサ	<i>Mergus serrator</i>	1	0	1	0.6
チドリ	カモ	セグロカモ	<i>Larus argentatus</i>	1	1	2	1.2
		オセグロカモ	<i>Larus schistisagus</i>	0	2	2	1.2
		カモ	<i>Larus canus</i>	1	0	1	0.6
		ウミネコ	<i>Larus crassirostris</i>	17	3	20	11.8
		ミユビカモ	<i>Larus tridactylus</i>	1	1	2	1.2
	ウミスズメ	ウミガラス	<i>Uria aalge</i>	0	1	1	0.6
		ウミスズメ	<i>Synthliboramphus antiquus</i>	14	11	25	14.7
		コウミスズメ	<i>Aethia pusilla</i>	1	1	2	1.2
		ウトウ	<i>Cerorhinca monocerata</i>	1	52	53	31.2
	不明	不明	不明	0	1	1	0.6
計5目	6科	19種	計(羽)	72	98	170	100.0
			割合(%)	42.0	57.6	100.0	

保護・回収された個体のうち98羽(57.6%)が、発見時すでに死亡していた。死体で回収された割合は、ウトウで最も高く98.1%を占め、次いで、シロエリオオハム(54.5%)、ウミスズメ(44.0%)などであった。

流出重油は、福井県の海岸を有する12市町村のすべてに漂着し、水鳥が保護・回収された場所は、三方町以外の沿岸11市町村と、北潟湖を有する金津町の計12市町村に及んだ。そのうち、芦原町の46羽(27.1%)が最も多く、次いで三国町の38羽(22.4%)、福井市の27羽(15.9%)、敦賀市の13羽(7.6%)などであった(図3)。

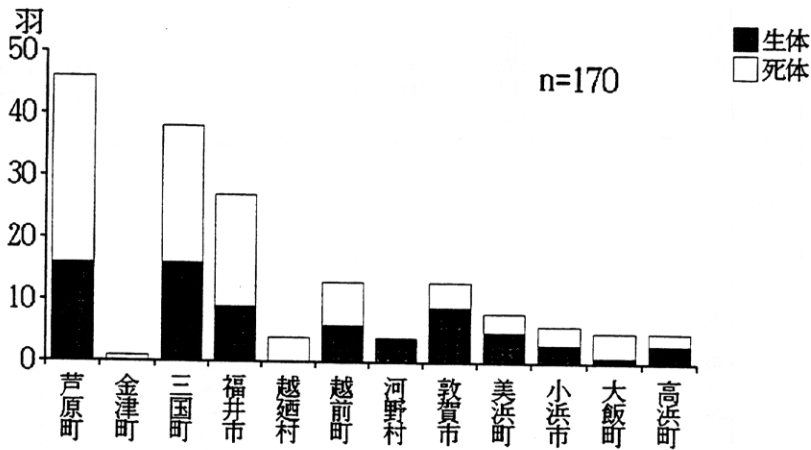


図3. 保護・回収された油汚染水鳥の福井県の市町村別個体数.